



綾錦卷之下

沾涼得



三十六番句合

一番

左

首歳不二



蓬萊やゆる秋のこゝろハ山 露沾

月影の影をさすいさへささるゝのこゝろハ根

右

春不二

名を伺ひしを知るふかしの花の雪 沾涼

○新勅撰 月影の根はとりのもささるゝのこゝろハ根

○身延の石の記云あゝ井のまより富士の山をさす

碧一 天雪白 白雲間 走卒 兒童 亦 仰顔
東海 初遊 多少 客 富山 不取 問何山

二番 左 芥

嬌びといたれしかりの芥菴 吟市

○枕草子 おゆめうきもの柳のこえりまき
うきものこえりまき又つぎるひあしは
たしつぎるあえりまきの枝つけり

○世談同言 正月の虫湯の月又七日の虫湯の
月大相庭を始ぬのあしあまを喜舎と信

右

みよきん家のまきれも雪芥 沾涼

○古今集序 人元未人のあましたんまのあまの
人元志もよあんなまのくまのあまの

三番 左 梅

聞 志めし人をそとさめ長の梅 東隣

○果堂禪話 梅花ハ悟入師

右

新瓦かこい立ちく来れ 園ハ梅 布仙

○碧巖集

隔山見煙早知是火
隔壑見角便知是牛

四番 左 初午

一日の水にと拍子きよの午 魚路

○杜詩曰

魚吹細浪搖歌扇 燕蹴落花舞舞筵

○千載

三室山谷のやまのちめらん書ハ水
岩くくなり 中納言園信

右

ふ午 一日又さる秋の夜 沾涼

誰邀計會一時秋

風吹枯木暗天雨 月照平沙夏夜霜

五番 左 くれ

をのう雲あんならう雲を 初望

溶く

○丈木抄

同少竹ををのうせりのをのうを
ちりて又するふさくうる 後末抄

○後羽子

花のさうりい冬草の而又十日し時正
ふらね七日もらうし立表より七十番お
ぬりし

右

花らおや 草よりの拾い種の上

臣女

○枕草子

三つとらりなるらこのいせえてといふ
みらよいしちいさうりやりのありけるを
よらんをいさしけをるをよむいし
おしあといふ見えなるいしうら

○未だ有_テ子_ヲ養_フ子_ヲ而_テ後_ニ嫁_ス者_ハ也_ニ 大學

六番

左 くれ

今朝とむしーゆる日や 山はる

水戸相田氏
沾鱗

○新古今

後鳥羽院

樹のくささふらみさう尾のさくー日もあふ
いろくね

○まゝくやん花の朝委夕うき 宗祇

右

さみみえい目にみりーさ様外

梅五

○詞卷

判を繰りくよりけくろふ尺なまこ
同まかりーさきまのちるる象我た

七番

左 くれ

菖乃跡さそい松にうありよな

琴夕

ふしーいりうけよそのうなるよー

石

よふはゆる人、家も年一々も産 沾涼

○新明親 何すをぬい河屋もたゞく少少田の
とゆるよゆるく立機り如 園其

十番 左 郭云

恋塚乃あふり、海々物々、之に 千法

○存拾遺 時々ぬと鳴き、くはくはぬあふり

多田のりあふり、中々、ん 津守園文

○新渡古令 けり、あふり、のそを、あふり、多田

田のさあふり、あふり、し 松波茶の園下

○月々、くはくはぬあふり、くはくはぬあふり、くはくはぬあふり

時鳥 郭云 子規 勸農者 杜鵑 鶴鳥 魁龍 杜宇

鸚鵡 蜀魂 望帝 別都賦算者 鶴 三月 狹肩 綱者

童子者 皆真者 皆之者 皆常者 不加婦 四子田長

○時不熟者 妹春者 常記者 五深者 凄書者 石如者

夜泊者 玉座者 早苗者 田奇者 羊津者 城者

誰彼者 邂逅者 宇津田者 田者 伽目者 免律良者

石

檜裏乃灯、あふり、郭云 泊涼

○拾遺 月つるよゆる、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

○袋草紙 俊和云、折少、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん

十一番 左 田云 信州松本

脊才乃子、住い、あふり、ん、あふり、ん、あふり、ん、三省

十六番 左 夕立

越前田中

北仙閣

夕立や 湯のわらうてまの湯氣 南花

○若紫春云 雨まじりしそそぐれふかきやう子
あつたつたよ湯のよきとあつたてたうきうき

右

夕立や 一隅きぬ雪武藏 沾涼

○菅家御集 あつたつたよ湯のよきとあつたてたうきうき

あつたつたよ湯のよきとあつたてたうきうき

十七番 左 夕立

歎乃耳に骨のささりたる 一唐

○走獸ノ中々象ノ耳ハ異ナリ 異物志云象ハ身ノ

牛ニ倍ス鼻ノ口ノ役ヲナス 馴良ニシテ教ヲ兼

言ヲ听トキハ跪ツク矣

右

石素、て牛のあをの〜 要のさ 梅立

○其一日 極熱天燥石 活法

○格物論云牛ノ母ヲ特ト云父ヲ牯ト云子ヲ犢ト云

○人ハ牛ノ角をさう人ノ馬をさう耳をさう

十八番 左 蟬直茅屋

水戸

蟬直茅屋 沾橋

○智度論云 春未甚初以時熱故小眠息除食患

右

蟬直茅屋 沾涼

其の推の事〜

下

八

十九番 左 移川

人乃自北か申く下も精進の如 逸志

○智度論云一切室中命為第一諸罪中殺生

罪為第一諸善中不殺生戒為第一

右

白髪しつゝ海あり精細船 涼之

○莊子雜篇漁父 有漁父者下船而來鬚眉

交白披髮 掬袂行原以上矣

二十番 左 長北坂

かりもの扱もやまぬ器の外 水戸 沾渡

○拾遺 丹波の如く権の如く

○土史撰 世二三十目より五六十目すとの

右

丹波尺ありす行城の 沾涼

○神社考云 玉城、西、山名、愛宕、山、秀出

於嵯峨城万仞之上

廿一番 左 一葉 秩父小川

園敷して荷札を落す一葉外 沾楯

○淮南子 一葉落天下知秋

○千載 却よほす心悟葉よて尺

○東鑑云 文治五年七月廿九日河内國を以

因明神子所奉幣。此石景季を以て當時の
初秋なり能因。右月公に出るものなり
作出する系季馬をひく一首を録す。

○不破 菅光院殿居士の人もおもしろい時
四つそなたの女園屋も民衆もあつた
ふらふらと心ざらぬあつた
外へて月をそとに梅ひくと録せよ

右

色ハ鱧乃一糸うね 沾涼

○東鑑云 文治六年十月十三日遠江守菊河常子
あつた作木三郎盛經小口をお副鮭の楚
割を折あま子息小室をい涉宿子
進申す云今割る食せしめぬ味
たつた懇切なりと申す
おのれ自毛一むおあまの自毛とあつた
おのれ自毛のつたおのれ自毛のつた

廿二番 左 聖三

今並鶏ト云

月ノ纏ス 敷いひりき 聖三 祖泉

○聖三卷云 此の巻はよりのものがあつた
そのあつたあつたあつたあつたあつた
きしもあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

右

物を海へつに乃目くあつたあつたあつた 沾涼

○後衣 都のあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

廿三番 左 月

月 推柴 酢里 南 媛 娥 千 楓

ついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり
の徳中 望月のついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり
いふるもさうあまはるきまのほよあきなり
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

右

我池のついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり

○新明記 月のついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり

○愚問賢注 只常の宗とていふも人の業の及ぶ
すなるもさうあまはるきまのほよあきなり
月のついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

廿四番 左 冬丸

ついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり

○支本抄 酒の名をびー至とていひー

○詩曰 坐對賢人酒 鮮于輔曰 醉客謂清者
為聖人 濁者為賢人

右

ついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり

○桑多也 曾子 程子曰 參也 竟以魯得之

心をなす 西風がくく 望を望つて ぬ思ふ 素堂

廿五番 左 冬丸

豊後府丹

ついでに物さのりもさうそあまはるきまのほよあきなり

○僧祇律云 有舍利名塔 無舍利名支提

○下

○上

○新古今 月夜といふそのおのれを頼り
くろをつらふに花のいろは

右

是もまゝの杜が母に名を承けたり 沾涼

○詩話云 杜子美母名海棠故集中并海棠詩

廿八番 左 落葉

松の背の瓦をかくく落葉の素 巾車

○菅家御集 刈藪とれをたさくゆふのふり
かけてありしをささぬらんもなき

右

今朝りし申渡す木の葉や田子の浦 布仙

○丙辰紀行 富士門の海たす一の志流なり下船

○新古今の古 後深草院の御所のもも弁河津の

紅葉浮水とてくろんをさしゆくろくろく
幾土よほてふくろく水といふもろくろく
なほありし

廿九番 左 ちんちん

海向へひよろく 紙出らるる 賀朝

○鸚鵡越 須戸の北よりと申るらし武庫らさく

○中納言のまゝの 浪うらまへりし
なほありし

○歌枕 猶聴半夜鐘

右

ぬく星の小ほくもささるる 沾涼

○古今卷 ちんちんをささるるあつた

あつたのちんちんをささるるあつた
まじりてあつたのちんちんをささるる

三十番 左 六八

イセ津清水村

罪おくしてきく素男の巨魁也 東江

○撰集抄 びし中納言歌基とて大後深草帝
乃時政流せしむるありしを我なくして好意の内
をえんとすし涙をなすしあふ

右

三方ハ箱ノ貞サ北あふらぬ 布仙

○唐詩注云 賈直言坐事退嶺山妻董氏云
昔死可別嫁妻不谷引繩束髮君非手
不解直言賤三十年還暑帛宛然

○修物抄 月あふりてびとびとさすむり
てあふるさすむりさすむりさすむり

○言葉 山がけに我下細のそはるる人
さすむりさすむりさすむりさすむり

世一番 左 七

さすむりさすむりさすむりさすむり 雪朝

○新中記 山がけに我下細のそはるる人
さすむりさすむりさすむりさすむり 道晃

○温庭筠高山早行詩 鶏声茅店月 人迹板橋霜

右

流るるものよふかの芳草のよれぬ 沾涼

○月 落鳥啼 霜滿天

○新古今 月あふりてびとびとさすむり
さすむりさすむりさすむりさすむり

世二番 左

笠重いい香の志しぐやや花はなええ浩浩 音里

○白氏文集 与君結髪髪五歳

○詩人玉屑 笠重兵天天雪雪鞋鞋香香楚地楚地花

右

髪髪やや志志ぐぐははいいのの糸糸柳柳 布仙

○若菜巻 ちのちははととるるををのの糸糸柳柳人人より

ににわわひひややああるるいいををままてていいととああててややままがが

二月二月のの十日十日そのそのののちち柳柳ののここもももも志志ぐぐははいい先

ささううののほほももままいいららいいたたちちららいいぬぬれれららをを

世三番 左

我我ゆゆりり枯枯ゆゆ思思くくやや丸丸合合ぬ 涼宇

○このこのこ自自記記 生生ああととああいいハハーーとと申申くくささたた今

ススミミヨヨののいいままままままてていいとと物物中中ととあありり

一一ののいいままままままてていいとと物物中中ととあありり

右

聖聖ハハ枯枯ゆゆここののいいままままままてていいとと物物中中ととあありり 涼宇

○ままのの富富士士郡

樹樹のの根根ををくくももくくななりりああららぬぬ香香にに対対ししてて

○むむのの岩岩嶽嶽山

樹樹のの根根ををくくももくくななりりああららぬぬ香香にに対対ししてて

○ままのの頼頼姓姓郡

樹樹のの根根ををくくももくくななりりああららぬぬ香香にに対対ししてて

下

○下

世六番 左 歳暮

人ものし我も初んくくくの一書 五百武

人依友

○世本田守武世中百首

世の中の人をありと初めと家なひくく人おらん
○西行賦云 花依風散人依友知惜

右

信濃なる歳暮車やうくく上 沾冷

○流流湖氷のうを狐くくく人馬性多と云

○述異記河水始テ合ス狐先行テ後渡ルコトヲ得ル

狐河水渡ラントシテ水声ヲキイテ后スルトク

○此三十六番八句合くくくを結くくく一讀くくく
考く古詩古番古語此句のくくくくくくく

○他國宗匠大略

●貞徳 — 良徳 — 良保 — 常矩 又季吟門ト云

和及 — 竹亭 現暮四 西番

物とえくくく海奈穂歩た山外 和及

くく月路至と閑くくくく 竹亭

下幕や 小妻の春の暇くくく 京 暮四

●貞徳 — 梅盛 — 信徳 — 信安 持哥存 去冬卒

くく柳や 枝子にくくくく 信徳

くくくく 渡の鏡乃 濁くくく 京 信安

●現露沾公 沾徳 現仙鶴 京 仙鶴

くくくく 生れものくくく 五月 雨 京 仙鶴

天正年中伊賀又米郡主菊岡丹波行任四代

現 房行 沾涼 實飯東三夜

○行宣 菊岡隨性軒 号有安如幻

行尚 盡程舎 以実名爲法名

現 行重 記之

和歌ヲ善ス

世談一統三百卷編書其外述作有多

現 行 有隣

伊賀

又米乃袖合山九品寺に存余のち

碑を之とて之をくして

隨性軒如幻

きふらの神合ふまけくかり坐の居かきも人を

五十歳の春沾涼くく去ふよ

菊岡

衆而そのかひわりの今期のみ

行尚

題 時 賞

伊賀

くらくすく鶴乃八書法間を

菊岡 記之

享保十三申のゆふ布故つて振くよけ せて雲

伊賀 菊岡

尔種を人をもむはらの夏木立 有隣

故園今も右もたりもろ 楓 布仙

○勢州山田

芭蕉門人

影之流く幾の枝や昔あつし 由

團友門山田

雲とかなもれありのゆるや時多 芦木

○紀列之連

須原 垣内

ふ里や指味口借しとくさく 環山

或人なめはよりのあつてを

びこよせく枝とくを柳しとく 冬嶺

目子於恨おしとくし被る如 湯浅千田 鷺舟
 吹溜る雪の夕、やとれぬ酒 垣内 守株
 蟬蛸の露をくむる柳 物奇 山茶井
山茶井 山茶井
 びーやむしと種い素言の系
 梶の葉の草あやゆと波小
 名はけりかたの果や葉の照り
 鯉の竿に成ほくきも如
 海辺ゆき
 名月や魚のそとと一物とも
 舟の女院色を抱て月夜なる
 冬嶺
 山茶井
 豊山
 守株
 環山
 鷺舟
 山茶井
 山

きりおちる
 深山の産物し

積つていふよ時雨のさるちう
 一段 天はききうら
 塩魚の荷より夕日の栗一て
 海士の浮場へ鶴とぞんと浮
 糠を研つて布馬の種よ草の月
 菊と豆腐は仕やう 影く
 藪入の先魚の成は 大ぬ丸
 裏吹巻いさくさく 雪
 切の言を鶴鶴いさくさく 雪
 紙飽の枝へついで 雪

雪朝
 沾涼
 布仙
 香乾
 沾涼
 布仙
 雪
 雪
 雪

八宗、殿の悟通子、扇ら、雨ふれ
船を押出、取屋、乃有
儒者、顔乃唐、へら、う、三回、戒、
キ、め、も、と、れ、も、も、き、せ、れ、一、
目、て、い、て、は、く、道、好、の、鶴、の、昆、布、
も、め、ぬ、い、ふ、上、羽、扇、論、中、
月、の、昼、初、の、束、も、那、一、男、が、い、
機、姿、一、む、く、ハ、七、三、く、ふ、ひ、
寺、師、幸、敷、屋、富、堺、い、く、如、海、
我、が、一、く、く、い、く、く、自、増、ハ、
欠、と、一、く、く、く、小、槌、ハ、金、の、
比、血、尾、乃、と、く、の、吸、子、ハ、淺、

布 仙
々
々
香 朔
布 仙
香 朔
沾 源
布 仙
香 朔

多、波、あり、鶴、ハ、意、う、く、ぬ、も、
跡、跡、ハ、一、信、ハ、高、中、ハ、猛、
聲、子、ハ、取、目、切、本、を、と、公、出、
ふ、切、く、い、ふ、と、十、三、七、
蓮、と、云、菰、治、離、の、喜、政、の、集、
拙、ハ、ハ、志、海、り、つ、き、る、ま、く、む、
つ、い、ま、の、重、六、少、く、道、依、母、子、統、
所、宅、美、く、人、ハ、系、子、地、
信、馬、東、の、拍、子、は、合、江、戸、育、
よ、い、る、ひ、く、く、の、出、く、中、新、糸、
大、ぢ、ハ、夏、の、ま、く、あ、い、ん、ま、ち、
く、く、く、お、も、ん、安、い、地、娘、

布 仙
々
々
香 朔
布 仙
香 朔
香 朔
香 朔
香 朔

その板の五膳のうら花は茶
世のよき一師は二月三月
布仙
沾涼

題東敷山鐘

雪朝甥
石内氏
叙叟

師不知 松木氏 宗因門
政則 同苗 現
蓮之 同苗 現
丈雅 同苗
長子

毛吹草三人
花の散 海やみの星の梅は
政則

江戸八百員三人
お宿り 天物もさき一時も
青雲

續江戸我三人
何人の疾より度はそ小東河
蓮之

七夕

七夕や藪の底は始あり
卜宅

梅とあて大滝子道一星乃あり
梅宇

天北川かみの意川
活津門 辻氏
吳竹

山多を今看らば又婦一星
沾涼

傳て来り星子傳 妙由井沖津
涼之

煩惱を一穂子流せ天北川
李條

下三府内

吳竹軒

仙理

素琴

左隣

日門 渡邊氏

柳 絃

下

世二

朝顔

あさなほやうぐい茶後女竜田川
物るや 卯麻の人の後の神
あさなほや 蔭美女の抱も捕
卯麻や 登子 悪改の 翠半
あはれや 傘 後も 娘よ 千せ

琴月
蓮之
涼宇
嘉祥
山丹

あつとこふんとうふしを
まゝとて 嘆(あさなほ)の 虫ワトリ

千翁門 水光堂 瓊角

あさなほや 夕(あさなほ)を まゝとて 女後の 後
胡(あさなほ)や 万(あさなほ)の 弟も その
卯(あさなほ) 一(あさなほ) まゝとて 星北花

一風
有林
桃翁門 巾車

あさなほの 子(あさなほ) 中(あさなほ) 一(あさなほ) 坊(あさなほ)
鶴(あさなほ) 尾(あさなほ) 子(あさなほ) 淵(あさなほ) の 体(あさなほ) あり 土(あさなほ) 用(あさなほ) 千(あさなほ)

沾徳門 沾津

目

月光 龍 女 北 花 一 女 細 橋
あさなほの 子(あさなほ) 中(あさなほ) 一(あさなほ) 坊(あさなほ)
今(あさなほ) 月(あさなほ) 如(あさなほ) 噴(あさなほ) う 虫(あさなほ) へ ち(あさなほ) ち(あさなほ) 馬(あさなほ)
あさなほの 子(あさなほ) 中(あさなほ) 一(あさなほ) 坊(あさなほ)
里(あさなほ) ハ 文(あさなほ) の 頂(あさなほ) 子(あさなほ) 此(あさなほ) 谷(あさなほ) 岩(あさなほ) 中(あさなほ) 一(あさなほ) 坊(あさなほ)
世界(あさなほ) 皆(あさなほ) 昼(あさなほ) を 樂(あさなほ) 屋(あさなほ) 子(あさなほ) 月(あさなほ)
あさなほの 子(あさなほ) 中(あさなほ) 一(あさなほ) 坊(あさなほ)
あさなほの 子(あさなほ) 中(あさなほ) 一(あさなほ) 坊(あさなほ)

逸志
壽角
ト宅
丈岳
魚路
鶴史
安祖
夕佳
有佐
大和郡山 云
葉角門 菽葉

月

百補子白珠垂りやきよの月 竹裏
 名月や淋しきまゝの夜は花子 琴月
 庭月を月暈とてよほしやの月 吉田氏 賀角
 月洗や文義よつら羊北原 北尾氏 千洗
 待宵の月ハ物うらまの南雲 竹田
 肉なきや仁玉の娘は流あり 信州 三省
 富まらぬももゆからう富まらぬ月 沾涼門 仙魚
 感もろや片頬ゆるるねの月 感もろ 芦玉
 羊の名も漢捕式部 十三夜 浪尾 陽秋
 新月やわらぬ下あうり店 仙某堂 五山
 ころころの水栗きり 十三夜

秦姓丈岳稿

もろくのきの舟よまをきては雅なるハ号
 多の風雅ぬきかろくくかろくかろく
 くらものまはしきり 風雅の和利ハもろく
 よびなりうらまはしきり 鳥りく
 風ハ諷し 其財ハ雅ハ正し 其まの歌す
 風ハ大小雅なる早にうらまのうらまのあまし海の
 風雅ハねよかろくかろくかろくかろくかろく
 我雅人湯湯よらびに志のくくくくくくくくく
 けの控めてまの夜まよらるる羊 雲れとさそあ
 きりくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

鶯

かゝるものも下まゝもをわくものゝやうに

世といふものよこしてまはれしものゝ船の香

又云むつゆる人の子もなるをがましと我むすあの
美をわをそのよに嫁しとくしと者通はるれを
雪の連綿の如く命をともすも風雅に歌連綿に
凡雅の根元をとしと通をそよよ命をすもて凡
雅人といふものもさうづ中にもよれをそと縁とあ
きをあらうとむかひなる事よ角きら我意あつて
家傳よ傳りて馬よおとる人あり凡雅のみらるを
そのよあしとてあも人もさしきと何もの事と
さうくあらうとていふものよ

評 價

人の名も月なり風あり 松園庵 丈岳

独 吟

あへて創りて如く此の如く
つとまて居つて積の如くして
そをさうさしよ 遠入 長指
我家の如くして 影 あすのなるも
あんとしと九又 果色もして 深
茶儀を志す^音山とすんおの芥川
情のかけこたふのあつて
暮冬を割ていそやとを庭せし
所用の如くし 子 抄書
一軍せんし舟なるの果是下
細と細の如くし 庭 香

籠の中や 籠なんせうく
角をいんせうく 海を 抱殿
そく 鞠の 脚袋をいんせうく
出 枕 しくば 柳 せう
わく 靴 あう ぬきや と 聖
結 脚の 番 せう せう 梅
君 凡 せう 一 回 甚 せう 詰 荷 せう
襪 せう 至 金 の 埋 せう
魚 腹 虚 の 扉 せう 菜 せう
卵 せう せう 子 せう け せう
く せう せう せう せう せう せう
又 合 点 せう せう せう せう せう

名 せう せう せう せう せう せう
新 せう せう せう せう せう せう
涼 水 へ 月 を せう せう せう せう
足 せう 目 尺 せう せう せう せう
回 船 の 蓋 せう 乃 せう 紅 の せう せう
日 中 の せう せう せう せう せう
白 ぬき せう せう せう せう せう
え せう せう せう せう せう せう
小 せう せう 湯 氣 せう せう せう せう
鞠 せう せう 流 せう せう せう せう
柳 せう せう せう せう せう せう
柳 せう せう せう せう せう せう

調和 貝風和 江原氏 調和門 調柯 同苗長子

先生と因て四十年來かゝる座を承るるの今も

養正す、神を、神音奉るべき 風和

海より竹と花と肉のまゝ 調和

夜梅

照るや梅多し人も星のまゝ 調和

介我 貝我尚 破岳代 現 周午 同苗

神くを戸かたさけ花壁の如 介我

鳥の雛や二月のまゝの枝 我尚

又とあふ花昔古の里と深くま 周午

良夜

名月や顔ハ帯白の人通玉 咫尺

羽翫ハ扇土ハ又あるところ 沾涼

名月やちいさくなりぬいせの海 猩

秋の野

舟浪如一里ハ直き壁きくけ 魚路

惜もとここの花をまじく海は首 東巴

唯よりりお葉撲野の積茶屋 倫仙

虚無僧の下駄よりあるお坐外 吟

身をある花壁波田の土足外 有舍

百姓の漬とりしとれ壁うね 沾雪

一城をえんる 花の花壁かゝ

三輪氏 蘭看 沾雪 有舍 沾雪

重陽菊

大原之子種の中ハ菊草

ありきれ菊もてしを親の慈

長き根や花の流れて菊の尺

きく後一の皆波なりさ久し

香を香の魚を香やきく酒

名のためよ多井越へき菊花柳

九年酒の月にも花の菊

生植

沈む日や海をすくも葉野既

落栗や清乃耳の小庭夜

かゆす海小里いあきう推流

文久のぬれ子糸線子の赤川外

不化寮子玉章海ると外

駕籠かある少り分り坂やきり

氣歌

層の菊の幸に二階もあるよ波

層の菊の淵田子控柳の夕月外

花虫もはるよ一束のぬれをきり

待月の枕しきしむの菊

まの層や氣遠るる夕廓

雑煉

音のしき墨絵のなるぬれ山

つきて是れ神いともと放生會

千菊門
雲浪堂

龍角

感生舟

鶴史

向井氏

卜宅

綠蔭舎

英松

紫井翁

沾涼

一瀬門

雪朝

素丸

賀朝

竜角家士

白山

交月人

調山

沾涼

調柯

五百武

智十

如水

紀州若山

露門
龍泉舎

吟市
露岳

飛園 声を色を出して躍る
 ぬちく出く乳い赤肉也とも躍り
 人まねの人まねをするかりり
 大まよや一浪の勢のうらむ
 牛橋を又らふ罪をしの音
 新海やその路のひらく
 小東橋をくまえて明
 いよせんぬき糸袋 金林寺
 秋月の海土も靴するいよる浪
 本鏡子張いあよりうまへ
 野とゆきのあざし一浪や石世
 秋情を鐘にゆきや和松一本

須貝氏 露庭
 小野氏 鶴史
 十箇門 右月堂
 露門 美安堂
 加島氏 好夕
 千箇門 善角
 快山
 如雲
 市紅
 水戸佐仲山氏 沾橋
 沾涼
 雪朝

相引湯本よき

中鶴衣ねえ侍と云ふ沙の雲衣の
 好むはるは春の風はさか
 美くく山福策たのびに流海就
 事とて力に流るを寿記海
 白中のつとくくよれ東江の
 中を月あまよ又持ちて
 山と海海をくくくくく

公町月よき

菊園沾涼始

山井魚橋

一 在り梅雪の白くくくくくくくくく
 一 一

荒蘭崎

五月の月をこぼりてゐる音 魚路

五石歳のまを鳴りやあ代の鶴

鴨立沢

水はくちをたす

湯本

舟の角くとまらぬ年なまは

二子山

夕まともいへるお月二子

箱根社

水たまり九尺の釜より葉の如く

講 僊

をささげ九輪川ぬくあゝの如

表も葉もも香樹かろす風

寒さげい大いさよをささ

下を舟すらのあまの五人

森あく水の朝日でも

拍子いさゞは白く

湯そあゝの生田やあきて

振若く富士をかめよか

もくらんとまゝても花あ

短と一度も味晴大豆の古

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

魚路

新集しつとらりと折れ格乳止
 福きんがりの吹上り松
 塩味の塩尻海一舟此海
 いとこり味一を抹香可の
 隅へ一龍乃息のゆつ里金
 くれ梅干しや所折の鱒
 物のひの死よとらり海七里
 多ききとる六ら海又らと
 作保姫乃未の妹森と嫁
 海より海とぬの塩投ほころひ
 単鞋を流しつとらり一と
 茶酒併飯ととらりの花

魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼

春のふる里歌るる子合ふ天気が
 目久子目久子 目久子 目久子
 月顔心とらりくハ雷の志次
 何しやう白ふかぢ子むとらり
 とらりんとて撰歌書しつとらり
 棒とほむるハ女のつとらり
 燈籠の裏ハ馬さつとらり
 とらりてとらり村乃斬り並
 學者にとらり女街の裏に沙汰
 少らり下々なる佃母も少り種
 中く手の膝よりとらりぬが新さつと
 葉を扱出スとらり根

魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼
 魚 沼

上はあやして...の系は...の人 沾
おのり...は...一時

西園の橋東の春帳或は茅屋にありてはたよらん子白の
いしききよや。答よのを葉かきよのてを帳とみよはす

秋来ぬと見えたる...
介我門涼技
梁技

五常

仁 相傘の六分...
義 いろく...
禮 先ッ...
智 燕...
信 君...
千翁息
不局
玲角
荷角
辰角

玄指

後...の長...を...人 露沾

小春

拈入乃代...
一体の袖下...
伊賀上整宗道
狸
調柯

時雨

藤卷...
全堂...
葛樹...
雨...
船...
子...
雪朝
賀朝
柳塙
千翁
善珠
調山

(下)

善角門人

霜 氷

まのねや馬さへ喰ぬ草食
恙てもく蝮蛇よん素の照
ひの響くまをく産むるその香
立雪のさしつかりぬ氷の如

冬 川

入水をおびはくりや冬河原
幣ふゆき水めさむきや後一
よこそい金の蓋なりを北川
川面うのぬき物なき一杭の上
白鷺乃結文長一氷り川
牧方の鳴きなき一急食舟

穀我
英松
周皎
竹裏

丹志
吳竹
東止
沾涼
臣女
泉竜

落 葉

果ハ皆佛乃通子落葉外
入相子撞のこされて落葉う如
頃日の下弦子音如き木の葉外
落葉流ふ治郎老き小倉山
記て麻て結子木の葉のうれ外
枝晴もて本分一羽おら葉外
枝と枝をの道をあふ落葉外
見下りか糸菴りのおらもうら
豆腐は尾長舞はる落葉うら
小鹿子体んで通る落葉外
一志め五今年のおのわら葉外

蓮之
雪朝
梅宇
東岡
吳竹
涼宇
紅夕
漁光
鈴角
李條

千倉門
一漁門
佳風門
佳風門

きつて飛んで尺達して足踏の木葉外
点きれの香菊の竹のあらそい外
きぬくの境八所 庭葉外

山
匍匐
溶

天の不測のきあり人よ聖表の質あり
今なき芥よまきくもせ

庭葉の上を下ろす
椿の葉の雨の葉り
濡るにの庭を添く

玉全
沾原
千本

雪

うつらや神香の海牛乃角
白妙やとて金七墨あのみ香
白炭の香菊一雪の料理福
きぬの尻のふを敷る雪修心

長水
賀朝
千洗
雪朝

きつる幕や五つらうの香あり

江戸
其孫

うつる香よかひく葉比翼楫
うつる香や扇根葉菊の行のむ

扇的
有林

顔又也

顔又や方十所ハ正月気
あつり折冬至の梅は神葉香
顔又や香菊始かみ

魚路
露庭
夕佳

拈野

あつる言はるも
さつる言はるも
拈野の言はるも
拈野の言はるも

ト宅
東隣
百二
布仙

UF

和歌才

まゆりのきくだ出〜るれの外 三竹

千鳥

蔚縹ハ神々以叶ふら〜り外 五百武

眠るるも長巻習ふ東の浪をき 傘車

ふれえ〜そ 毒海へおを渡ら〜り 樓川

唱て居 物多〜 胸は小舟をき 楚殊

每房をえきと紙を隠すら〜り外 紅夕

ぬけ〜らのきのよをえらるる外 布仙

寒

技志こく 春のふれ〜ら 未石

黄蘗ハ種のみきもさび〜り外 五百武

さるよ 氷河 根生ら〜ら 千鳥 鵬角

蓮の葉や花〜てもおれ〜にの中 露言門 尺草

尚集舞踏の初尺草老人ハ一集の首級を〜りて
あ〜と感懐せ〜る 千鳥 年〜り ち〜り ぬ
く〜とあ〜りよかぬ〜ら 加〜り ち〜り ぬ
白を〜んとおれの足〜り 八十 年〜り ち〜り ぬ
古人の跡は〜りぬも〜り ち〜り ぬ
のま此不遠あるを指すれ在らんを〜り ち〜り ぬ

生植

京宗臣 石壽菴

水松や馬より様よ抱あ〜り 暮四

茶の花や花〜りぬ 沾梅

ほつ〜り〜り ち〜り ぬ 雲

枝を葉子見〜り分つ水松花 吟竹

水松のみ〜りぬえなり 女武者 溶く

雜 冬

降子子ハ縁子を以ててを推
 足跡のそよよりきみみよれ外
 誓死して松の腕を冬乃瀧
 炭俵あきくや人を八王子
 ころあを補云信 苦汁
 六くくくやまのくくく一里抗
 六くくく乃色や麻のくくくろる
 芳よりひくく云婦一夜配里
 汲小ごす様のくくくや淀八裾
 羊尾
 明日多ん乳をえええ福壽草
 沾涼
 好夕
 千靈
 安祖
 梅五
 有佐
 布仙

人丸大明神聖像

宗祇法師恭敬像
 杉白木御長五寸五分
 頓阿法師作 任吉奉納一軀
 御筆後以岸姫松作之

正一位乃子傳ハ於阿波所の作宗祇法師之教
 乃其傳にして宗教のついでに伊賀國上野候東氏
 喜三 生國尾刈清洲織田家士 後爲醫齋居伊賀國 之宗教の門人なり
 乃く少くもを附屬 是政安 號三悦沾涼父
 禱多而後服部土芳 半左衛門ト云 芭蕉高弟にあはる羊角
 二十余年以て不宝永のころ予故郷に歸る

初此係を以てする土芳も早古人し妻婦
まなり誰にもくはあは政安の云土芳は
甥本津宗七師とて言ふもあまも通つて
同小宗七云土芳在世の時此跡来り北余目そ
あり連津の跡ありて後彼係を語嗟して
賦詩一笈より中して云その人のとてあま
天神の宝號ありて出とてその人の紙よ

天満宮宝號一幅 山崎宗鑑筆 山口不貫書

と記ししとて云ふはていやくは長門の
乃人かりしし于時享保十四巳酉八春道芝と云
小のつひのまの人北凡倫仙余之助ト云、
我の人店の係あり是れ其の紙ありて連教師

乃不指りて謂ある像し連教の會ふとて
杖をひあはるる筆を削り筆跡多し流しし
今の我の應せとてし流しあへりてりちりて
五月廿二日倫仙此係をとりて云ふはまも我
ありて全れ一職合の紙ありてこれとてり
辭して云くこの事をうたれいんていふあり
そのとら人の心を同ぬ是山口不貫生国長門国蒲刈
享保十四七月卒
于時七十二性所は芝門人丹野惣柵 道芝ノコし受くしとてり
よあまの心歸影なりては事さく信ありて
まの茅屋いといふもそのおとあまを當所
熊守神田宮の境内に遷座なりとてり

崔下菴譜書

人店が明神法樂

影うのすくくと新樹乃高角山 雀下流
硯よる石見のゆく 朝渚の 菊田布仙
凍しき和ほのくの帆、松の肩 同 梅五

造立の連各法樂

六の神の鳥帽子なうく和の牡丹 宇田川春
帆かかしの海や茂るや神の砥 笠井魚路
去るまよの月一曇し花外本 中島立貞
初より井一あまに浮くや雲の海 河津玉風
とつ垣もあま一あまの唯作り 小森篤之
みきり一やみくたを通も花さぬ 岩田涼之
時とまやましくもふるれ神標 北尾倫仙

中よーとや秋の神話のすー川 又米田智朝
神・詠いさえくもーほーるん 北尾千洗
ゆるそーに明るのまゝあまの風 栗本雪朝
時見一唯今在、ゆゑの実 川勝文岳

柄本人丸 ^{七ヶ}の大事 ^{石見}國戸郡の

人あ柄の末のそあまの童形を七出祝と云う
石見國より化生まると云事 ^{口史}

神龜元年二月十八日年 ^{口史}
持統帝文武帝聖武帝平城帝 ^{の御事}
式人の云其御家 ^{の御事} ^{の集乃}

中の事のみならず、各歌の趣もよくしたるもの
古今集の中の日やあゝあまきやむし〜と云々の
事を取り出し大和の事とて作らば、是に修徳物語
乃中のみならずあゝあまき〜と云々とや七
るを採りて〜あゝあまき〜と云々とあり
あゝあまき〜と云々とあり
人信四人より 橘中入信 山入信 玉手入信 押海入信
あゝあまき〜と云々とあり

第一節三巻 16巻のつれづれ

泊涼子乃後娘被機と建家名始
誹祖以是當世〜至と門弟と携家
宗通乃統々〜と此〜匡〜と云々
系譜と詳行〜して〜て〜
次に古往々明師より累世先達
及現在作者乃教与集く〜と云々と
緯と〜と〜最後に与合歌仙等

〇七

〇七

微々此雜更と彼也——く授候
 ありよそ——きり古風の公道あり
 中比の伊達家今此地好浅る事
 な——吟嘯乃流眸と暢くささ
 取よ是家地あり——やさしく云爾
 涼子の請よ趣て野雙卜宅漫に
 跋寸頗鄙陋と恥家而已



